

## 〔その他〕

## 岐阜県立看護大学における教育能力開発委員会の活動と課題

宮本千津子<sup>1)</sup> 兼松恵子<sup>2)</sup> 坪内美奈<sup>3)</sup> 諸岡豊子<sup>4)</sup>  
奥井幸子<sup>5)</sup> 平山朝子<sup>6)</sup>

## A Report on Faculty Development Committee at Gifu College of Nursing

Chizuko Miyamoto<sup>1)</sup>, Keiko Kanematsu<sup>2)</sup>, Mina Tsubouchi<sup>3)</sup>, Toyoko Morooka<sup>4)</sup>,  
Yukiko Okui<sup>5)</sup>, and Asako Hirayama<sup>6)</sup>

## はじめに

教育能力開発委員会は、4つの講座から推薦された4名の委員と学長、学部長の6名により構成され、平成13年2月に第一回会議を開催した。本委員会の基本姿勢として、本学固有の教育理念と目標を達成するために、教員個人レベルでの能力開発に加えて、授業科目分担者グループ、講座、学科全体など複数の教員が協力しながら行っていく「組織としての教育能力の開発」を重視することとした。さらに、活動計画をたてるにあたって、自分たちの問題意識を灯りとし、手探りでもよいから本学に固有のありかたを見出していくこととした。また、その試みこそが教育能力開発であるという共通理解をはかった。

このため、諸大学においてファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development: 以下, FD) 活動として実施されているものの多くが、まず講師を招いた講演会から開始されるのと異なり、他大学のモデルを手取り早く取り入れた模倣からはじめるのではなく、まず、講座会議を介して教員のニーズを各委員が聴取することから開始した。この聞き取りでは、他講座が担当としてある科目の内容や現状を把握したい、授業に役立つ具体的な工夫を知りたいなどの意見が収集され、急ぎ、授業に関する情報交換会の開催を計画・実施した。ついで、短時間では検討しきれない課題について、グループワー

クを中心としたワークショップを実施した。本稿では、今年度実施した2つの企画を報告し、教育能力開発委員会の方向性と課題を検討したい。

## I. 第1回教育能力開発会議：情報交換会(表1)

平成13年5月17日および6月21日の2日間、教育内容や方法に関する情報を講座間で共有することを目的に、「第1回教育能力開発会議：情報交換会(以下、情報交換会とする)」を開催した。情報交換会では、1から3セメスターの授業を通じて、他の講座に伝え共有したいことに主眼をおいて4講座がそれぞれ担当している授業について報告することとした。報告にあたって、授業に建学の精神や教育目標、大講座制の意図を反映させる工夫や各講座が担当している非常勤講師の専門関連科目も含め、各講座の報告は1時間以内とした。その中に質疑応答も含めた。情報交換会終了後に、報告した講座の教員に対しては「言い足りなかったこと、もっと伝えたかったこと」、他の講座の教員に対しては「聞き足りなかったこと、もっと知りたかったこと」を、また全員には「もっと議論したかったこと」、その他に、教員の能力開発に関する意見・要望等についてアンケートを行うこととした。

5月17日は育成期および成熟期看護学講座が担当している授業について報告がされた。育成期看護学講座から

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing  
2) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing  
3) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing  
4) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing  
5) 岐阜県立看護大学 学部長 Dean, Gifu College of Nursing  
6) 岐阜県立看護大学 学長 President, Gifu College of Nursing

表1 情報交換会発表内容

講座	発表内容
地域 基礎 看護学	1. 地域基礎看護学講座について 地域基礎看護学講座の特徴を説明した上で、概論・方法・実習の位置付けそして各概論の特徴について説明。 2. 地域基礎看護学講座が担当する概論の教育内容・方法について 概論 A・B・C と社会福祉学概論について、各々の担当教員が授業の概要及びディスカッションを用いた授業展開の工夫と学生の反応、事例を用いた少人数教育の試み、学生の理解状況に合わせた授業内容の工夫、入学初期の学生に概論を講義する時の考慮、具体的な授業方法とその評価、専門関連科目の概論としての位置付け、学びを深める工夫などについて報告。
機能 看護学	1. 機能看護学講座教員担当科目について 機能看護学講座が担当する専門科目、専門関連科目、教養科目について担当教員が各科目の授業概要と授業の形態、テキスト、教材、提示課題、工夫点などの具体的方法、実施後の評価と今後の課題、現時点での改善点について報告。 2. 非常勤担当科目について 1 および 2 セメスターで開講された非常勤講師担当科目は、講座配置の担当教員が報告。
育成期 看護学	1. 育成期看護学講座の学習の展開・年次別のすすめ方 4 年間の教育課程の中で、どのように育成期看護学を展開していくかを、セメスターごとの学習科目を報告。 2. 育成期看護学の講義の詳細 1 および 2 セメスターを中心に①授業の目的、②学習内容、③担当教員が努力したこと、④授業の自己評価、⑤次の授業への課題に分けて報告。
成熟期 看護学	1. 専門科目の紹介 成熟期看護学概論 A・B の構成、授業の組み立てを紹介し、概論の中のグループワークに焦点を絞って学習目的・課題、構成、指導体制、成果について報告。 看護方法 1～4, 6, 7 について、授業内容と講義に際して工夫した点を中心に報告。 2. 専門関連科目の紹介 責任教員がすべて非常勤講師であるため、非常勤講師が工夫したこと、非常勤講師との打ち合わせ方法や授業聴講など担当教員が工夫したこと、課題にわけて報告。

は4年間の育成期看護学における学習の展開・年次別進め方、および1から2セメスターの講義の目的、学習内容、担当教員の努力、自己評価、次の授業への課題について、成熟期看護学講座からは成熟期看護学概論、看護方法、および専門関連科目について教育内容、講義に際して工夫した点を中心に報告があった。育成期看護学講座に対して科目の順序性や授業の工夫、成熟期看護学講座には解剖生理の学ばせ方、高校で生物を履修していない学生への対応、授業の意図を非常勤講師と共有する際の問題などについて質問があった。

6月21日も同様に地域基礎および機能看護学講座から報告がされた。地域基礎看護学講座からは概論・方法の位置づけ、各概論の特徴について説明後、地域基礎看護学概論 A・B・C および社会福祉学概論について各々の責任教員から教育内容・方法・工夫・学生の反応についての報告があった。また、機能看護学講座からは、各科目について担当教員から授業概要と具体的な方法や工夫、実施後の評価および課題について報告があった。質疑応答では、地域基礎看護学概論における「学生が自分

で考え、それを深めることを大切にする」ことについての具体的な方法・働きかけについて、機能看護学講座のグループワーク内容と方法、統計の授業でふれている範囲と演習の有無について質問があった。

アンケートの結果は、他の講座の授業内容がわかり、有意義であったという意見や感想が多かった。また、報告内容についての質問や意見、他の講座の授業内容についてもう少し詳しく知りたい、自分の授業の参考になったという回答が大半であった。学内の教員が一堂に会し、教育内容について相互に情報交換するという初めての試みであったが、教育内容、授業の工夫など講座を越えて討論すべき共通のテーマが明らかになった。

## Ⅱ. 第2回教育能力開発会議：ワークショップ

平成13年9月6日に、第2回教育能力開発会議：ワークショップ（以下、ワークショップとする）を本学において開催した。

### 1) ワークショップの概要

ワークショップでは、表2に示した4つの基本的考え

方を柱として、グループディスカッション、講座ブース、コミュニケーションボードを企画した。

表2 ワークショップの考え方とスケジュール

1) ワークショップの基本的考え方	
(1)	情報交換会で共有したかった情報および共有したくなった情報を交換する
(2)	日頃行っている工夫や努力、特に本学に固有のカリキュラムであるからこそ必要な工夫や努力とその効果について話し合う
(3)	教育活動展開上の課題を見出し、改善の方向と方法を検討する
(4)	今後もこのような活動を継続していく基盤づくり、雰囲気づくりを目指す
2) スケジュール	
9:30~9:45	オリエンテーション
9:45~12:15	グループディスカッション
12:15~13:30	昼食
13:30~14:30	講座ブース／コミュニケーションボード
14:30~17:00	グループディスカッション

a. グループディスカッション：テーマは表3の通りである。グループ分けは、事前に各教員に参加したいテーマについて希望をとり、その希望に添いつつ、講座や職位のバランスを配慮して決定した。そして、グループで進行役を選出し、テーマに沿って進め、進行役は、後日ディスカッションの経過や特に議論が深まった点などをまとめて提出した。グループメンバーは各自ディスカッションしたいこと、提示資料等を持参した。

表3 グループディスカッションのテーマ

- ①：授業で取り上げている体験学習の目的や方法、授業全体での位置付け、効果、課題など
- ②：看護技術演習として行っている技術項目と、その方法、順番、課題など
- ③：予習・復習を含めた授業資料づくりやプレゼンテーション、教材活用の工夫など
- ④：90分の授業時間をどう使うか、学生の理解に合わせる工夫、授業展開の具体的な工夫
- ⑤：グループワークの目的や方法、授業全体での位置付け、効果、課題など
- ⑥：看護学概論における学生の学び（学外演習レポート等を用いて具体的に）

b. 講座ブース：展示内容は表4に示した。情報交換会でもっと知りたかったこと、伝えたかったことを中心に展示することとし、運営は、各講座に任せた。

表4 講座ブースの展示内容

<u>地域基礎看護学講座</u>	
・	情報交換会で意見が寄せられた看護技術演習、社会福祉学概論の地域検討に関する資料
・	演習やグループワークの課題や用いている事例、学生の反応
・	平成12年度学外演習のまとめ
<u>機能看護学講座</u>	
・	STREAM 技術を用いた IT 上での新たな教材提供の試み
・	情報交換会で質問の多かった機能看護学概論およびそのグループワークについて
・	英語に使用した教材
<u>育成期看護学講座</u>	
・	授業科目の内容・項目、担当教員の思いやコメント、学生の評価や意見
・	情報交換会で希望があった学生に記入させている健康手帳
・	道徳教育に関する資料
<u>成熟期看護学講座</u>	
・	情報交換会で質問の多かった専門関連科目の内容について、指定教科書・資料・授業風景を撮影したビデオ(14巻)および CD-ROM
・	学生が購入している解剖生理に関する参考書

c. コミュニケーションボード：全体の教員に向けたディスカッション・テーマや問いかけをホワイトボードに掲示し、これに対する意見や回答を各自がカードに書いて貼り付けていくという方法で行うディスカッションを企画し、これをコミュニケーションボードと呼称することとした。掲示予定のテーマは表5の4つだが、当日の問いかけ発信も自由に行った。

表5 コミュニケーションボードのテーマ

- ①：看護過程学習や実習において使用する様式とその教授・使用方法
- ②：看護方法の理解に必要な解剖生理に関する知識をどう確かめ、どう提供しているか
- ③：現場での英語力、研究での英語力ー学生に要求される英語力はどのようなものか（英語担当教員より）
- ④：学生は統計処理能力をどの程度身につけたらよいか、実際のデータ処理を行える能力はどの程度 必要とされるのか（情報処理担当教員より）

これらの企画や当日の会場設営などの準備は、委員を中心に行った。各教員には参加後の意見・感想を以下の6項目で提出してもらった。①グループディスカッションで学んだこと、有意義だったこと ②グループディスカッションでもっと知りたかったこと ③グループディスカッションでもっと議論したかったこと ④講座ブース／コミュニケーションボードについての意見・感想

⑤ワークショップ全体についての意見・感想 ⑥今後の教育開発のためのアイデア, 委員会への要望等である。これらの結果は, 11月の教授会において資料(A4 12ページ)と共に教員に報告した。

## 2) 実施と参加教員の反応

### (1) グループディスカッション

#### a. テーマ別ディスカッション内容(表3)

テーマ①: 体験させることの意図は何か, 効果はどうであったのか, 体験の効果をどのように確認したか, 体験をどのように授業にいかしたか, 体験学習の限界とリスクなどについて議論されている。その中から, 学生の学習段階を踏まえ, 学生に体験させることがどのような意味をもつか, 教員側の整理が必要, 各科目で行なっている体験学習のねらい及びその内容について, 学内で共有し, その情報を得た上で, 学生の実習指導を行なうことが必要, などの示唆を得ている。

テーマ②: 技術演習のあり方と現行のカリキュラムでの問題点が議論され, 科目間で看護技術演習の内容について情報を共有し調整していくことが必要である, 大学として学生が卒業時点で到達すべき看護技術の目標について検討する場が必要であるなどの示唆を得ている。

テーマ③: 学生の意見や質問を次の授業で知らせ, 学生間で問題を共有できるように, 学生にはフィードバックを求める権利があるということ, 患者を授業に招聴するには, 患者, 学生双方にプラスになるような配慮が必要であるといったことが議論された。そして, 学生の意見や質問を次の授業でフィードバックするには, 多大な時間がかかり時間の確保が難しいという問題点が指摘された。

テーマ④: 学生の理解度をみる必要性と見極め方, その困難さや学生の理解度にあわせるということ, 単位を与えない決断と単位を落とした学生への教員の関わりなどが議論されている。

テーマ⑤: グループワークという形態を採用する目的, 主体的に学ぶことの促進, 目標の設定と評価の観点, 目標達成への促しの方法などが議論され, グループワークならではの目的を明確にして方法を選択し, ときに修正していく必要がある, 前後の授業とつなげていく工夫が重要, 評価は短期的・長期的に考えて行なう必要がある, などの示唆が得られた。

テーマ⑥: 到達目標設定の考え方と難しさ, 学外演習の学びを, 授業にどのように結び付け活用できるかなどが議論された。各概論における演習の目的・方法を大学全体で共有する意義が大きいこと, 概論の学外演習について, 看護者の活動をみるという目標は到達できているなどの示唆を得ている。

#### b. 教員の反応

多くの教員が, 学びが多くグループディスカッションは有意義であったと評価していた。各テーマから一つずつ代表的な意見を挙げてみると, 「体験学習は目的の明確化と学生のフォローが重要である」「他講座の教員と看護技術演習の現状と課題を共有できた」「視聴覚教材の必要性を感じつつも, 時間的技術的に困難な現状であることが課題」「教育学の立場からの理論の紹介が参考になった」「授業の中でグループワークを行う目的を明確にする必要性について考えた」「他講座での概論や看護方法への学外演習の学びの活用とその課題を知った」である。

次に, もっと議論したかったこと・知りたかったこととしては, 「体験学習の目的や評価について」「少ない技術演習時間の中での各講座の工夫や評価, 課題」「マルチメディア教材の作成と学内での具体的活用のしかた」「オムニバス形式の授業の利点と欠点」などがあげられた。

### (2) 講座ブース(表4)

各講座は表4のような企画を展示した。

教員の反応として, 詳細な授業のスケジュールがわかり科目間の重なりなどが整理できた, 各講座の授業の現状や工夫が把握でき参考になった, 各講座で工夫し作成した資料や実際に授業で使用している教材や資料を手にとってみることでよかったなどの意見が寄せられた。いずれの講座でも, 展示内容に情報交換会で得た意見・感想を反映させる工夫をしていたが, このことが教官の関心を引き付け, 積極的な相互交流を促進させたと考えた。

### (3) コミュニケーションボード(表5)

テーマ①では, 質問への回答という形で, 意見が提示された。テーマ②においては, 質問に対し多くの情報が寄せられ, さらにこれに対する質問や提案がなされるという形で議論が展開された。テーマ①②については, 全

員に対して質問を発することができ、紙面に記載して意見を述べる方法であったため、それぞれの状況や立湯からの意見を、時間にとらわれない自由な雰囲気の中で、述べまた知る機会となった。特に②では、今後の検討課題となる意見も寄せられた。ディスカッションが発展していく手がかりとして、寄せられた意見から検討課題を取りだし、さらに問いかけていくような工夫が必要と考える。テーマ③④では、自分の体験を交えた多様な意見が提示されたが、それぞれ1人の教員が発信者であったので、運営上、議論までは発展しなかった。そこで、発信者が述べた意見に対してどのように受け止めたのかコメントを終了後に寄せてもらうことにした。これにより、各教員は、率直に意見したことが、今後の授業においてどう対応されていくのかを知る機会となった。意見を一方的に述べるにとどまらず、意見交流になるよう工夫していくことは大事であろう。

#### (4) 今後の企画に向けての課題

ワークショップ全体については、他の講座・教員の具体的な授業の取り組みや工夫・苦勞を聞き、自らの工夫や努力も提示しながら意見交流ができ有意義だった、講座の枠を越えた教員間の交流が図れてよかった、普段感じていることや疑問に思っていることなど教育について話をするよい機会だった等、このワークショップの企画内容について肯定的な意見が寄せられた。このように、教員自らの授業の取り組みや工夫、苦勞をざっくばらんに意見交換することを通して、授業改善を促すよい機会となり、今後の継続が必要と考えた。

一方、今回のワークショップについて、テーマの重なり、グループ編成、時間設定等に関する意見が寄せられた。また今後に対する要望・アイデアとして、開催時期、メンバー編成、話し合った意見や成果の活用、企画内容の提案の意見があった。これらは、委員会としての運営上の課題と受け止めている。「まず自分の担当授業の検討をする時間を確保することが課題」といった意見もあり、組織としての教育能力開発と同時に個人としての教育能力開発に意欲を持ちつつも、開学2年目で諸々のことが同時に進み、煩雑さに忙殺されてジレンマを感じている現状が読み取れる。

### Ⅲ. 委員会活動の方向性と課題

以上、教育能力開発委員会の活動として情報交換会とワークショップについて報告した。最後に、本学における教育能力開発活動の特徴から本委員会活動の方向性と課題を述べたい。

わが国におけるFD活動は少数の意欲的な大学によって開始され、現在は、大学を超えたネットワークの形成に至っている<sup>1)</sup>。しかし多くの大学は、平成10年の大学審議会答申によってFDとして何らかの施策を講じざるを得なくなったというのが現状である<sup>2,3)</sup>。このような大学におけるFDは従来の研究重視、学生軽視という体質を改善しようという試みであり、それゆえ抵抗も大きく実質的な効果があがりにくいことが指摘されている<sup>4)</sup>。しかし、本学は開設されたばかりであり、教員構成も若く、長い伝統をもつ大学がその発展過程のなかで蓄積させてきた風土は幸いながらない。また、講義の結果が演習・実習における学生の行動として表現されてくる看護学教育の性質からも、学生不在の一方的な教育が起こりにくい。したがって、本学の教員にはもともと学生をターゲットとした授業改善に前向きな体質があると考えた。

このような恵まれた前提において、本学の教育能力開発活動には、さらに大学の理念達成へと導く組織としての教育能力の向上を目指すという目的が課せられている。一方で、本学には創設期であるがゆえの課題が山となって積みれ、これに対し全教員が知力体力の限りをつくして取り組んでいる状態である。これらの点において本学教員に求められる教育能力とその開発方法は固有のものである。

したがって本委員会では、今後とも他大学の模倣ではなく、日々の教育実践において重ねている努力と工夫が、組織としての教育能力開発につながるような活動を行っていきたいと考えている。具体的には、授業内容や方法に関する情報の共有を図り、これにより喚起された問題意識から新たな検討テーマを引き出すこと、そして活発で有意義な議論が行われるよう工夫した企画を提示していくことが課題である。このため、現在、情報交換会やワークショップ前後に提示された意見・提案を分析し、次年度に向けて議論のテーマ探しおよび企画作成を開始している。

また、テーマ探しには、必然的に本委員会の機能は何

なのか、すなわち何がなぜ教育能力の開発なのかという検討が伴う。これは、全学で関わる教育能力開発テーマのひとつとしてとらえたい。

今回報告した2つの活動に対しては、教育能力開発活動に対する肯定的な評価が寄せられ、活動の意義が理解されたと考える。今後も、個々のもつ前向きなパワーが個人のそして大学全体の教育能力の開発につながるような、本学らしい教育能力開発活動を進めていきたい。

## 引用文献

- 1) 宮腰賢：大学セミナー・ハウスのFD事業，IDE 現代の高等教育，412；56，1999.
- 2) 有本章：ファカルティ・ディベロップメントの歴史と展望，IDE 現代の高等教育，412；8，1999.
- 3) 井上理：ファカルティ・ディベロップメントの課題，IDE 現代の高等教育，412；12，1999.
- 4) 阿部和厚：北海道大学におけるFD，IDE 現代の高等教育，412；28，1999.

(受稿日 平成14年2月12日)